

税金を徴収する側の仰天 ヌルすぎる実態を暴露!!

税務署の生ぬるい実態を
暴露した松嶋洋氏



税務署も警察もどうなってるの!? 消費税増税が既定路線となった今、その税金を徴収する税務署のあきれた実態を暴露した元国税庁調査官がいた。あまりにヒドい裏側とは――。一方、世間を騒がせたオウム最後の逃亡犯の逮捕からちょうど1週間。日本の警察の問題点がいくつも浮き彫りになった追跡劇も、その道のプロが徹底分析した。

残業年間2〜3日 家賃1万円寮住まい おいしい経費

一般のサラリーマンなら「な仕事です」と言い切る。税務署の繁忙期は4〜5月と9〜12月上旬に集中する。「年末や1月は忙しいので企業には相手になれない。同じく2〜3月は確定申告で忙しい人が多い。8月はお盆で企業が休み。6〜7月は年度の切り替えで職員が異動があって動けないんです」。極端に言うところ、おおよそ半年しか本気で働かないのだという。

しかも、いわゆる「9時〜5時勤務」が当たり前で、時間内に企業の調査を行う。「残業は年間2〜3日しかない」。職員は家賃1万円の寮に住めるから、給料はたまに一方だという。世のサラリーマンが聞いたら卒倒しそうなど恵まれた環境だ。

税務署

また、調査官には「おいしい特権」もある。「一般客を装って、飲食店などの調査を行うのですが、その経費が数万円以上ということが多くあります」。松嶋氏も調

警察

る。日本の当局はもうろん我々に情報開示することもないし、変なプライドがあって、捜査の妨げや個人情報だのと言って、情報を全く出さない。今回はようやく最後に防犯カメラ映像や筆跡こそ公開したが、普段から細かい情報を積極的に出していく姿勢が全くなかった。

「店の席数と、1人の客がどれだけお金を使うのを見て、店の売り上げをザッと推測するんで、私たちが怪しまれはいけなくておすしを食べます。そのときに上司が『いくらでも中口食べていいぞ』と。さすがに驚きましたね」

同様の事例は高級クラブへの潜入や、なんと「ルスやソープランドなどの風俗店でも行われるというからうらやましい。『税務署職員も公務員です。増税するより先に、公務員給与を平分にしたい』と話す松嶋氏(42)の主張を税務署職員はどう聞くか。(塚田賢慎)

オウム事件「終幕」から1週間 米バウンティハンターが解説



「別人としか思えない菊地容疑者の昔と今」



オウム真理教元信者高橋克也容疑者(54)の逮捕から22日で1週間。逃亡から17年もかかった逮捕について、様々な問題点が指摘された。一連の逮捕劇は、昨年大みそかに元幹部平田信被

告(47)が出頭、オウムへの関心が再び高まったことが契機となった。懸賞金が500万円から1000万円に引き上げら

連捕された3人は17年前に公開された手配写真とはまるで別人だった。元神奈川県警刑事の小川泰平氏(50)は、「当局は(違つ)髪形やメガネをかけた複数のバリエーションを持っているが、一般には混乱を与えるという

理由で基本の1枚だけでしたが、やはり3パターンぐらいは用意した方がよい」と指摘する。懸賞金制度についても荒木氏は上限額1000万円の撤廃を求める。「ピンラディンには5000万ドル(約40億円)、フセインには2500万ドル(約20億円)の懸賞金がかかけられた。もし高橋容疑者の首に1億円の懸賞金がかかっていれば、私も動いていたし、日本中でわがハンターが血眼になって探していた。勤勉な日本人は地道な捜査活動は得意で、情報も集まるものです」

オウム事件の教訓を未来の解決事件に生かせるか。(小林宏隆)